

令和7年1月31日

コスモエコパワー株式会社  
代表取締役 野地 雅禎 様

日本野鳥の会秋田県支部  
支部長 佐々木 均 (公印省略)  
秋田県横手市前郷一番町 1-21

公益財団法人 日本野鳥の会  
理事長 遠藤 孝一 (公印省略)  
東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル

日本雁を保護する会  
会長 呉地 正行 (公印省略)  
宮城県栗原市若柳川南南町 16

「(仮称) 秋田市沖洋上風力発電事業に係る計画段階環境配慮書」に対する意見書

現在、貴社が縦覧を行っている(仮称)秋田市沖洋上風力発電事業に係る計画段階環境配慮書に対して、鳥類の保護の観点から下記の通り意見を述べる。

#### 記

事業実施想定区域(以下、計画地という)に設定されている海域(以下、当該海域という)は、私どもが国際基準に基づいて「海鳥の重要生息地(マリーン IBA)」に選定した「飛島・御積島」および環境省が指定する「生物多様性の観点から重要度の高い海域」である「雄物川河口周辺」と重なっている。また、計画地の北側には国際的に重要な水鳥の渡りの中継地として、「東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ(EAAFP)」の参加地となっている「八郎潟干拓地」がある。これらのことから計画地は、ガン・ハクチョウ類、シギ・チドリ類、カモメ類などの水鳥類のみならず様々な鳥類にとって重要な渡り経路となっていることが分かる。さらに計画地に近い陸地に繁殖する希少猛禽類であるミサゴやハヤブサの採餌海域となっているなど、鳥類保護の観点から考えて当該海域は計画地から除外されるべきである。

以下に、日本野鳥の会秋田県支部(以下、県支部)及び日本雁を保護する会が把握している当該海域における鳥類の生息状況と事業の中止を求める理由を述べる。

#### ガン・ハクチョウ類について

計画地のすぐ北側に位置する八郎潟及びその干拓地である大潟村の周辺に渡来するガン類としては、シジュウカラガン(国内希少野生動植物種、絶滅危惧 I A 類)、ハクガン(絶滅危惧 I A 類)、亜種オオヒシクイ(天然記念物、準絶滅危惧)、亜種ヒシクイ(天然記念物、絶滅危惧 II 類)、マガン(天然記念物、準絶滅危惧)等が知られている。日本全体に飛来するガン類のおよそ 8 割が移動の際に八郎潟を経由しているとされており、渡りのピーク時にはその飛来数は 1 日で最大 20 万羽に達する。かつて渡りの途中に立ち寄る中継地の役割が強かった八郎潟は近年、越冬地としてガン・ハクチョウ類に利用されることが多くなっており、越冬期に宮城県など太平洋側や新潟県など日本海側の各地に渡った個体群も、越冬期間中を通して大潟村と各越冬地間を往復する動きが頻繁に見られている

る。最近の GPS 調査により、ガン類が一大越冬地の宮城県伊豆沼から大潟村に移動する際、計画地の上空を通るルートを利用していることが判明している（図 1）。また、昨年大潟村で行われたオオヒシクイの GPS による追跡調査により、日本海沿いを山形県鶴岡市の下池などを経由して新潟県の福島潟などへ南下する個体が複数記録されている（図 2）。

図 1 ガン類の越冬地間の移動の例

資料提供：山階鳥類研究所



図 1-①マガン 2022 年 2 月 17 日

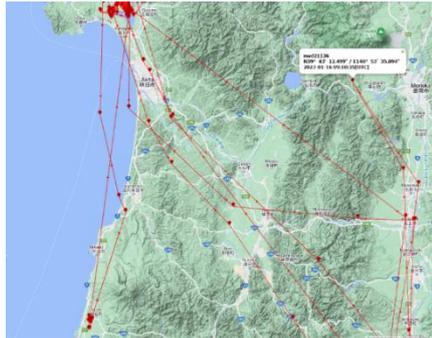


図 1-②シジュウカラガン 2023 年 1 月 16 日

図 2 GPS\_AFAM 移動経路\_大潟村-新潟 20250118 現在

資料提供：山階鳥類研究所



図 2-①オオヒシクイ（首輪：B39 デバイス ID：05CF）

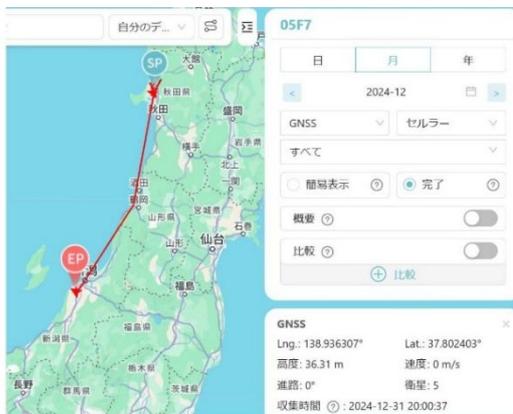


図 2-② オオヒシクイ（首環：B43 デバイス ID：05F7）

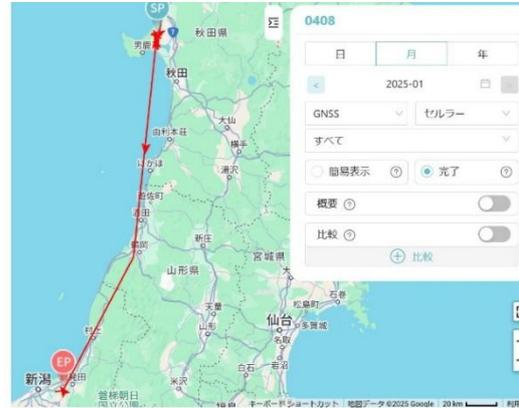


図 2-③オオヒシクイ（首環：B46 デバイス ID：0408）

今後の降雪状況によっては更に南下する個体が増加することが予想される。これらの個体は再度、日本海沿いに北上して大潟村へ戻る事がこれまでの調査からも予想されており、今後の GPS 調査結果からも明らかになる可能性は高く、渡りの際に風力発電施設（以下、風車）建設予定範囲を通過する可能性が高い。実際にこれらの移動の際に由利本荘市～秋田市沖の洋上を飛行する姿が県支部会員や地域住民により目撃されている。特に、降雪が多い年には越冬地と中継地を往来する回数が増加するため、経路上に風車が存在することはその移動を阻害する障壁影響が発生するだけでなく、衝突の確率も増大させる。以上の理由から、秋田市沖の洋上に風車を建てるべきではない。

また、ガン・ハクチョウ類は、晴天時の日中だけでなく夜間・悪天候や視界不良時にも移動することがあるため、このような条件時には風車群を回避することが難しく、衝突の危険性が格段に高くなる。さらに前述の通り、これらの鳥類は渡来期・渡去期だけではなく、越冬期にも気温や積雪状況によって他の中継地や越冬地との往復を何度も繰り返すことも少なくないため、バードストライクの増加が懸念される。

さらにコクガン（天然記念物、絶滅危惧Ⅱ類）が、計画地の北側の男鹿半島南岸部や計画地の南側の由利海岸に冬季渡来することが確認されており、洋上風車への衝突や生息地放棄等の影響が危惧される。

#### カモ類について

計画地周辺では多くのカモ類も確認されており、ツクシガモ（絶滅危惧Ⅱ類）、アカツクシガモ（情報不足）、トモエガモ（絶滅危惧Ⅱ類）などの希少種も含まれる。また、渡りの際に淡水ガモを含む多くのカモ類が洋上を飛行することを県支部会員が確認している。カモ類は渡る個体数の多さに加え、休息のために飛行の途中で着水するなど、飛行高度を0～200mで頻繁に変えるという飛び方の特徴から、洋上風車の建設の影響を大きく受けることが予想され、カモ科鳥類保護の観点からも当該海域に洋上風車を建設すべきではない。

#### シギ・チドリ類について

計画地の北側にある八郎潟・男鹿市船越海岸・潟上市天王海岸や計画地に隣接する秋田市北部の海岸及びその内陸側に隣接する水田はシギ・チドリ類が飛来する場所であり、日本海側では数少ない貴重な渡りの中継地となっている。ここでは多くの種類が記録されているが、中にはセイタカシギ（絶滅危惧Ⅱ類）、シロチドリ（絶滅危惧Ⅱ類）、コシヤクシギ（絶滅危惧ⅠB類）、ホウロクシギ（絶滅危惧Ⅱ類）、オオソリハシシギ（絶滅危惧Ⅱ類）、ヘラシギ（絶滅危惧ⅠA類）、ハマシギ（準絶滅危惧）、シベリアオオハシシギ（情報不足）、オオジシギ（準絶滅危惧）、アカアシシギ（絶滅危惧Ⅱ類）、タカブシギ（絶滅危惧Ⅱ類）、ツルシギ（絶滅危惧Ⅱ類）、カラフトアオアシシギ（絶滅危惧ⅠA類）など多くの希少種も含まれている。

これらシギ・チドリ類も渡りの際には洋上を飛行することが確認されており、貴社事業の立地はこれらの鳥の移動を阻害する可能性がある。干潟の少ない日本海側には代替地がないため、当該海域に洋上風車を建設すべきではない。

#### カモメ類について

計画地はカモメ類の生息域でもあり、洋上及び海岸は多くの種類のカモメ類の越冬地となっている。また、計画地の北側にある男鹿市船越水道河口にはズグロカモメ（絶滅危惧Ⅱ類）がたびたび飛来する。さらに、荒天時には外洋性のミツユビカモメの群れが当該海域上を飛行することもある。これらカモメ類は越冬期における採餌地間の移動および春秋の渡りの際に計画地の海域を利用している。

当該海域に飛来するカモメ類で大部分を占めるオオセグロカモメおよびウミネコは近年、

個体数の大幅な減少が報告されており<sup>1)</sup>、オオセグロカモメは準絶滅危惧種に指定された。カモメ類は世界的にもバードストライクが発生しやすい種群であることが知られている<sup>2)</sup>。カモメ類は個体数が多いため生態系の機能や安定性に与える影響が大きいともいわれており、人為的影響を最小限に抑える必要があり、当該海域に洋上風車を建設すべきではない。

#### その他の水鳥について

計画地は、洋上風力発電施設の建設による生息地放棄が頻繁に確認されているアビ<sup>3)</sup>をはじめ、ウミガラス（絶滅危惧ⅠA類）、ケイマフリ（絶滅危惧Ⅱ類）、マダラウミスズメ（情報不足）、ウミスズメ（絶滅危惧ⅠA類）、ヒメウ（絶滅危惧ⅠB類）など多くの海鳥の生息地・採餌地と重なっている。また、アジサシ類が渡りの時期に飛翔する姿も目撃されている。

さらに、海外の洋上風力発電施設では育雛期に多くのバードストライクが生じるコアジサシ<sup>4)</sup>（絶滅危惧Ⅱ類）が雄物川河口付近において繁殖しており、風車建設の悪影響が懸念される。雄物川河口及び秋田運河ではカラシラサギ（準絶滅危惧）が複数回記録されており、分布域から考えて日本海上を飛翔して飛来していると考えられる。また、秋田県内では、アカオネツタイチョウ（絶滅危惧ⅠB類）の保護例が複数あり、日本海沿岸で保護された個体も日本海上を移動していた可能性が高い。加えて近年、コアホウドリ（絶滅危惧ⅠB類）が秋田港に入港したクルーズ船で保護された例や、計画地近くの洋上で観察撮影された例もあり、かなりの密度で生息している可能性がある。

このような希少な鳥類の生存に悪影響を及ぼす洋上風車を建設すべきではない。

#### ミサゴについて

当該海域の沿岸部はミサゴ（準絶滅危惧）の繁殖地となっている。中でも計画地は魚食性のミサゴにとって重要な採餌場所となっている雄物川河口にかかっており、影響が懸念される。日本でもすでに多数のミサゴがバードストライクに遭っており<sup>5)</sup>、計画地のすぐ南側の由利本荘市内沿岸でも1件、風車による衝突例がある（2018年）。

計画地付近は繁殖地であるだけでなく、渡りの際の通過点でもある。ミサゴは冬に越冬地に移動し、春に繁殖地に戻るが、北海道の積丹半島で標識された2013年生まれの子が2018年4月に計画地のすぐ北側に位置する男鹿市船越海岸において県支部会員により確認された。この個体は2019年に北海道積丹半島で繁殖していることが確認されたため、船越海岸は渡りの途中に利用したことが判明している。本事業計画はこのミサゴの移動経路を阻害する恐れがある。

近年計画地周辺の潟上市・秋田市・由利本荘市沿岸に大・中・小規模の数多くの陸上風車が建設されており、ミサゴの生息環境は急速に悪化している。これ以上ミサゴへの累積的影響を避けるためにも当該海域で洋上風車を建設すべきではない。

#### ハヤブサについて

当該海域の沿岸部はハヤブサ（絶滅危惧Ⅱ類、国内希少野生動植物種）の重要な採餌場所となっている。本種は洋上を渡る鳥類を頻繁に狙うことが知られているが、捕食に集中することで風車の存在に気付くことができず、バードストライクに遭う可能性があると考えられるため、この海域に洋上風車を建設すべきではない。

#### その他の重要種・希少種について

その他にも計画地周辺の沿岸・内陸ではこれまでに、マナヅル（絶滅危惧Ⅱ類）、タンチョウ（特別天然記念物、絶滅危惧Ⅱ類）、ナベヅル（絶滅危惧Ⅱ類）、コウノトリ（特別天然記念物、絶滅危惧ⅠA類）、クロツラヘラサギ（絶滅危惧ⅠB類）、オジロワシ（天然記念物、絶滅危惧Ⅱ類）等の希少種が県支部会員によって確認されている。さらに近年はアカアシチョウゲンボウが春に定期的に飛来していることもわかってきた。

また、計画地南西の沖合に位置する飛鳥は、春季及び秋季の渡りの時期に、多種多様な渡り鳥が観察される場所として全国的に有名だが、飛鳥で記録されている希少な鳥類（ヤツガシラ、コヒバリ、カラアカハラ、マミジロキビタキ、ハシグロヒタキ、ムネアカタヒバリ、ツメナガホオジロ、シロハラホオジロなど）が計画地の沿岸周辺で確認されており、飛鳥経由で洋上を飛翔して渡来している可能性が高い。事実、飛鳥航路の離岸距離 10 km の洋上で、北に向かうヒヨドリの大群が本支部会員によって観察・撮影されている。

小鳥類は群れで夜間も渡ることが多く、バードストライクの発生が懸念される。本事業風車はこれらの鳥類の渡りの障壁になる可能性が高いため、洋上風車を建設すべきではない。

#### 累積的影響について

計画地の周辺には既に多くの陸上風力発電施設が建っており、ミサゴ等の営巣環境を悪化させている。また、本事業計画地は現時点で渡り鳥たちが既存の陸上風車を避けて通るための迂回ルートになっている可能性が高い。計画地の北部と南部には大規模な洋上風力発電の計画が進行中であり、この上さらに本事業が実現することになると由利本荘市から男鹿市にかけての洋上が風車で埋め尽くされることになり、渡りの移動ルート全体が大きく阻害されることになる。生態系を無視するような本事業の計画は白紙に戻すべきである。

#### 協議会の設置について

今後貴社事業を進める場合には、諸調査から得られたデータや各関係者の意見を共有して風車建設の可否を検討するため、地元団体や鳥類保護関係者および鳥類や風力発電の専門家等で構成される公開の協議会を設けることを求める。

以上

#### 参考文献

- 1) 先崎理之・照井 慧・富田直樹・佐藤文男・福田佳弘・片岡義廣・綿貫 豊 (2019年) Long-term declines in common breeding seabirds in Japan (日本における普通海鳥種の長期的減少) Bird Conservation International (鳥類保全学の専門誌) DOI 10.1017/S0959270919000352
- 2) 浦 達也 (2015年) 風力発電が鳥類に与える影響の国内事例 Strix Journal of Field Ornithology ©Wild Bird Society of Japan Vol. 31, pp. 3-30
- 3) Stefan Heinänen, Ramūnas Žydelis, Birgit Kleinschmidt, Monika Dorsch, Claudia Burger, Julius Morkūnas, Petra Quillfeldt, Georg Nehls (2020) Satellite telemetry and digital aerial surveys show strong displacement of red-throated divers (*Gavia stellata*) from offshore wind farms, Marine Environmental Research, Volume 160, 104989, ISSN 0141-1136
- 4) Joris Everaert, Eric Stienen (2007) Impact of wind turbines on birds in Zeebrugge (Belgium) Significant effect on breeding tern colony due to collisions Biodiversity and Conservation 16(12):3345-3359
- 5) (公財)日本野鳥の会 (2020年) 日本国内における風車によるバードストライクの事例数 日本野鳥の会 HP example\_birdstrike20200311.pdf (wbsj.org)